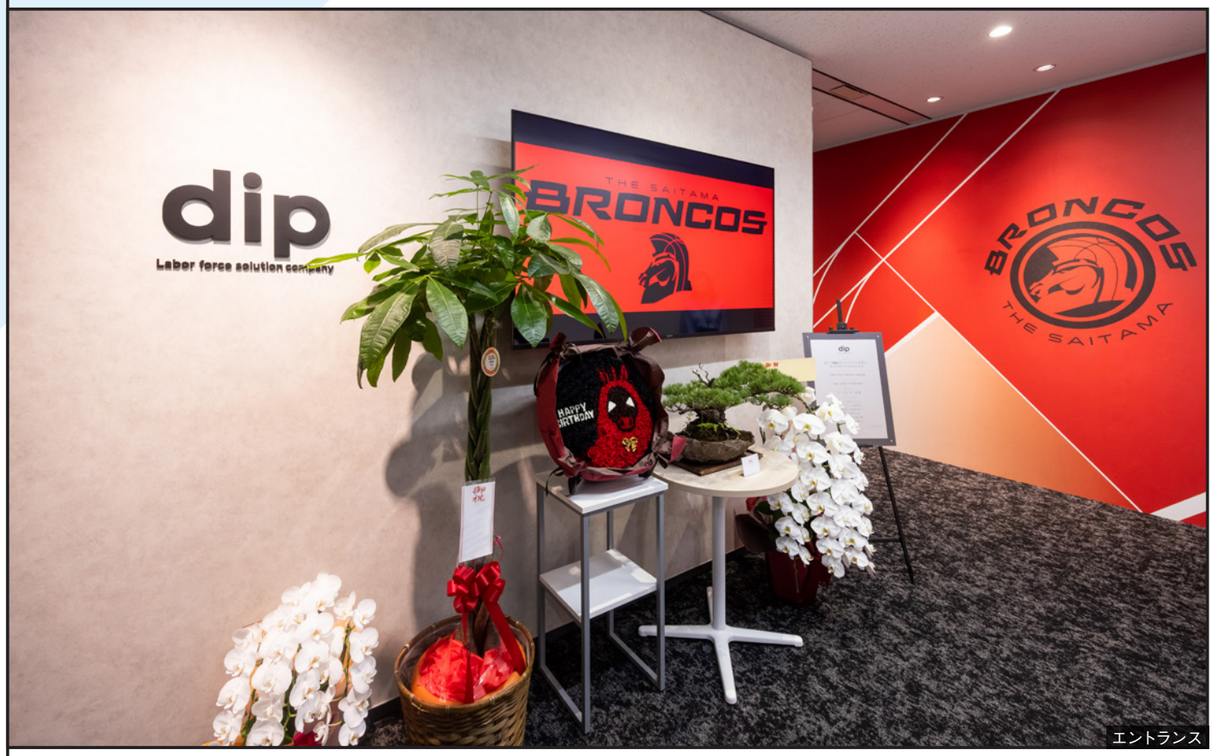
ディップ株式会社

2026年10月取材

ディップとさいたまブロンコスがともにつくる 地域に根差したオフィス



エントランス

求人情報サービス「バイトル」「はたらこねっと」などを運営するディップ株式会社。同社は大宮の営業拠点の移転・拡張を実施し、プロバスケットボールチーム「さいたまブロンコス」の運営会社である埼玉ブロンコス株式会社との共同オフィスを構築した。埼玉での事業拡大を目指すディップと、地域に根差して活動するブロンコス。両社の業務を支え、地域との交流も見据えた新拠点について、移転の背景やオフィスに込めた想いを伺った。

CONTENTS
- 営業拠点の拡張を機に、ブロンコスとともに働くオフィスへ
- 事業拡大を見据え、大宮で新たな拠点を選定
- コストを抑えながら、両社に必要な機能を形に
- 「dip square」を中心に、人が集い、交流が生まれるオフィスへ
- ホッと力を抜いて安心して戻れるホームから、会社の未来を創る

ディップ株式会社


人事総務本部
コーポレートサービス戦略推進室
室長
藤川 淳氏


人事総務本部
コーポレートサービス戦略推進室
チーフ
中川 優衣氏

三幸エステート株式会社


国際営業部
藤村 理


法人一部
吉田 聖

営業拠点の拡張を機に ブロンコスとともに働くオフィスへ

ディップの旧大宮拠点では約110坪を使用していた。埼玉エリアでの営業拡大に伴って部署や人員が増え、次第にスペースが不足。グループごとに座席エリアを設けていたが、増員とともに従来の運用が難しくなっていた。

「営業拠点のため、普段は外出しているメンバーも多いのですが、夕方近くや部の全体会議などでメンバーが集まってくると席が足りず、椅子をMTGスペースから持ち寄って対応することもありました。人員の増加に伴って無理が生じるようになり、オフィスの手狭さを感じていました」（中川氏）

ディップ大宮オフィスでは、顧客訪問などでの外出を除き、出社を基本としている。営業担当者は訪問の合間に、オンライン商談や提案資料の作成、求人広告の原稿作成もオフィスで行う。そのオフィス内では執務席に加え、商談に使えるスペースを求める声も多く、商談用ブースの確保も移転に向けた課題となっていた。

一方、埼玉ブロンコス側でも、従来は倉庫を兼ねた仮のオフィスを使用しており、チーム運営を支えるオフィス環境の改善が課題となっていた。2025年に同社を子会社化し、チームのオーナーとなったディップは、こうした双方の課題を踏まえ、両社がともに働く新たな拠点づくりを進めることとなった。

「埼玉に根付いているブロンコスと、埼玉に力を入れたいディップが融合するオフィスをつくろうと考えました。両社が密に連携することで、地域により深く浸透していけるのではないかと考えたのです」（藤川氏）

その考えが、新オフィスの方向性を定める出発点となった。

事業拡大を見据え 大宮で新たな拠点を選定

物件探しでは、大宮エリアを軸に、200坪以上の広さとアクセスの良さを条件とした。今後の事業拡大も見据え、賃料とのバランスも考慮した。

「駅からのアクセスを重視し、大宮駅を中心に探していました。ただ、空き物件が少ないエリアなので、情報が入り次第、早めにご紹介いただけるようお願いしていました」（藤川氏）

物件の紹介・選定を支援した三幸エステートの藤村と吉田は、テナントの退去情報をいち早く捉えて紹介。通常の募集物件から居抜き物件まで、幅広く提案した。

「以前から手狭だと伺っていたため、中長期的に物件情報のご提供やご案内を続けていました。雪が降った翌日に内覧したり、夜にシェアオフィスをご案内したりしたこともありました」（藤村）

「三幸エステートさんは本当にレスポンスが早く、いつも大変親身です。普段から移転に限らず、周辺物件の相場などの相談にも丁寧に対応していただきました」（藤川氏）

そうした中で移転先に決まったのは、JR・私鉄「大宮」駅から徒歩5分、約220坪のワンフロア。駅からのアクセスが良く、必要な座席数を十分に確保できる広さも備えていた。

「最初に内覧したときは、横長のフロアが印象に残りました。フロア全体の見通しも良く、複合機やミーティングスペースなどユーティリティの配置を工夫することで、自然とコミュニケーションが生まれる動線がつくれると思いました」（中川氏）

「駅からのアクセスに加え、2階なので階段を利用できる点も魅力でした。営業は外出が多いため、エレベーターを待たずに出入りできるのは大変便利です」（藤川氏）

コストを抑えながら 両社に必要な機能を形に

オフィス構築では、普段から各拠点のオフィスづくりを担当するメンバーを中心に、藤川氏と中川氏を含む4名が参加。設計会社の選定では、必要な座席数の確保やブロンコスのイメージを取り入れることなどを条件に、3社によるコンペを実施した。

「天井や床などに手を加える工事（通称B工事）はビル指定工事会社で見積も高額となる傾向があるため、できるだけ構築物を作らずに家具や什器、それとPhone Booth

（WEB用のBooth）で空間をデザインする方針にしました。コストを抑えられて、その考え方に合った提案かどうかを重視して設計会社を決めました」（藤川氏）

設計会社の選定後は、新オフィスに入居するディップの営業担当者に加え、ブロンコスの興行・イベント・チケットなどを担当する各チームにも要望をヒアリング。それぞれの業務や活動に必要な機能を整理し、レイアウトに反映していった。特に、ブロンコス側から多く挙がった収納の要望を受け、グッズやユニフォームなどを保管する専用倉庫も検討した。

「ブロンコス側からは、興行用の荷物を整理して置ける倉庫に加えて、グッズやトロフィーなどを展示できるスペースが欲しいという声があり、またファンミーティングやアウェーの試合観戦を自分たちのオフィスで行いたいという要望がありました。そうした今まで実現できていなかった声を一つひとつ拾いながら、必要な機能をオフィスに取り入れていきました」（藤川氏）

「dip square」を中心に人が集い、交流が生まれるオフィスへ

そうして完成した新オフィスでは、ブロンコスのチームカラー「サベージレッド（SAVAGE RED）」を随所に取り入れている。**エントランス**には「dip」のロゴを掲げ、大型モニターでブロンコスの試合映像を放映。横の壁面には**チームロゴとコートをモチーフにしたグラフィック**をあしらい、賞状などを飾れるピクチャーレールも設けた。

「今回はディップだけのオフィスではなく、2社共同で盛り上げていくという考えがあります。エントランスにお越しいただくだけでも、それを感じてもらえる空間になるよう意識しました」（中川氏）

エントランスの先に広がるのが、ブロンコスの執務エリアを兼ねた**カフェスペース「dip square」**だ。同エリアには、ブロンコスのロゴをラッピングした自動販売機や、挽きたてのコーヒーを楽しめるカップ式自販機を設置。床にはバスケットボールコート半面を実寸大で再現したラインを描き、グッズやトロフィーを**展示するスペース**も新たに設けた。

「壁面には、総会で掲げた『感謝』というテーマを従業員の顔写真で表現しています。その周りには、開所式に向けてメンバーが書いた言葉も残しています。ブロンコスらしさだけでなく、ディップが大切にしている想いも感じてもらえる空間にしました」（藤川氏）

こうした両社らしさを表現するだけでなく、「dip square」は多目的に活用できる空間として計画されている。ミーティングや従業員同士の交流はもちろん、取材やファンミーティングなどにも活用できる。一部の椅子には、ブロンコスの試合会場で実際に使われているものと同じタイプを採用。バックパネルや映像設備を備え、用途に応じた使い方を可能とした。また、ディップの執務エリアとの間にはセキュリティラインを設け、執務エリアと切り分けて利用できるようにしている。

「テーブルはキャスター付きなので、用途に応じてレイアウト変更が可能です。最大で90席ほどを並べることもできますし、アウェー戦の際にはモニターやスクリーンを使って、みんなで試合を観戦するような使い方も想定しています」（中川氏）

「執務エリアはそれぞれ分かれていますが、『dip square』では偶然顔を合わせることがあります。そこで『今度の試合はホームだね』とか『取引先を試合に呼ぶのでチケット欲しいな～』といった雑談をしたり、ブロンコスをもっと知ってもらうための情報共有をしたりしています。ディップの営業担当者が、お客様にブロンコスとの関わりを紹介することもあり、お客様との会話のきっかけにもなっています」（藤川氏）



チームロゴをあしらったグラフィック



カフェスペース「dip square」


展示スペース


執務エリア



Phone Booth


オフィスステーション「マッチ箱」

ディップの執務エリアは、取材時点で約110人が利用。デスクは4人掛けから5人掛けに変更できる仕様とし、今後の増員にも対応できるようにした。

Phone Boothは、1名用・4名用・6名用を多数設け、それぞれに空調を完備。オンライン商談や少人数での打ち合わせにも利用できる。一方、会議室はあえて1室にとどめた。

「営業から商談スペースを増やしてほしいという声が多くありました。実際には少人数の会議も多いため、今回はPhone Boothを充実させています。必要に応じて移動でき、今後のレイアウト変更にも対応しやすい点も評価しました」（中川氏）

各Phone Boothのガラス面には、藤川氏の発案で背番号入りのユニフォームがデザインされたサインを採用。窓際の柱には、ディップのフィロソフィーを表す「dream」「idea」「passion」の文字をあしらうなど、執務エリアにも両社らしさを取り入れている。

また、複合機のそばには、本社でも採用している**オフィスステーション「マッチ箱」**も設けた。印刷物の整理などができる作業スペースで、名称には「誰かとマッチングする」という意味が込められている。

「印刷物を整理していると、そこに居合わせた別部署の人と自然に会話が生まれることがあります。こうした何気ない場面が交流のきっかけになっており、移転後の従業員アンケートでも、快適さやコミュニケーションの取りやすさを評価する声が挙がっています」（中川氏）

ホッと力を抜いて安心して戻れるホームから会社の未来を創る

両社の新オフィスは、日々の働く場にとどまらず、採用活動にも生かしていく考えだ。求人事業に加え、さいたまブロンコスの運営を通じてスポーツエンターテインメント事業にも力を入れるディップ。新たな大宮拠点を通じて、こうした事業の広がりや新たな取り組みを伝え、採用面での発信にもつなげていく。

最後に、オフィスの価値について伺った。

「営業として働いていたときも、オフィスに出社して直接関係する方々と会話することで学べることや、新しい考え方を得られることが多くありました。営業のノウハウを共有したり、困ったときに相談したりできる。営業先などから戻ってきたときにホッと力を抜いて安心していられる、みんなのホームのような場所にしたいと思っています」（中川氏）

「オフィスは、会社の未来を創っていくものだと考えています。ここから情報が発信され、組織文化が生まれ、新しく入る人達がスタートを切る。だからこそ、こだわりを持ってつくり、これからも継続して従業員に快適な働く場所を提案していきたいですね」（藤川氏）

埼玉に根差すブロンコスと、埼玉での事業をさらに強化していくディップ。それぞれの仕事に取り組みながら、同じ拠点で日々の接点を重ねていく。新たな大宮拠点は、両社で働く人をつなぎ、それぞれの活動を支える場所として歩み始めている。

COMPANY DATA

dip
Labor force solution company

「バイトル」「はたらこねっと」などの求人情報サービスや、企業の採用・業務効率化を支援するDXサービス「コボット」を展開するディップ株式会社。これらのサービスを通じて労働市場の課題解決に取り組むほか、2025年にはプロバスケットボールチーム「さいたまブロンコス」のオーナーに就任し、スポーツ分野にも事業領域を拡大。人材・DX・スポーツと事業領域を広げながら、地域社会への貢献にも取り組んでいる。